



学研・教科の研究

体育・保健体育 ジャーナル

2020.5
第8号
Gakken

[シリーズ] オリンピック・パラリンピック教育 2020のその先へ ② オリンピックとビジネス ー成長産業化するスポーツー 田島 良輝……	1
スポーツを創るーオリンピック・パラリンピックの先を見据えたスポーツとの関わり方の提案 実践編ー 藤田 紀昭……	4
[シリーズ] 学校現場でのスポーツ・コンプライアンスを考える ③ スポーツ界のひずみをなくすため 武藤 芳照……	7
パラリンピック教材 『I'mPOSSIBLE』 ースポーツと共生社会ー 安岡 由恵 with Sports 井上 康生さん 柔道男子日本代表監督……	10 12

体育・保健体育に関する情報や、授業のヒントなどをお届けしてきた『小学校体育ジャーナル』、『中学校保健体育ジャーナル』は、合本となり『体育・保健体育ジャーナル』として生まれ変わりました。小学校、中学校の枠組みを越えて、系統性を踏まえた指導が重視されている今日に対応し、これまでよりもさらに充実した内容で、指導や子どもたちの学びに役立つ情報をお届けしてまいります。

シリーズ オリンピック・パラリンピック教育 2020のその先へ ② オリンピックとビジネス ー成長産業化するスポーツー 大阪経済大学准教授 ● たじま よしてる 田島 良輝

1 オリンピックとビジネスの深い関係

今日は2020年3月25日です。ほんの数か月前までは、東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京大会）の選手選考が佳境を迎え、日本国内のみならず世界中が盛り上がり始めている、そんな状況を想像していました。しかし、昨日24日の夜、国際オリンピック委員会（以下、IOC）は、新型コロナウイルスの世界的感染拡大の影響により、東京大会を「1年程度延期」することを発表しました。新型という予想のつかない敵を相手に“延期”の決断を下したことは、本当に難しい判断の連続の上だったと思います。

東京大会の開催について、予定どおり開催をするのか、1年あるいは2年の延期となるのか、それとも中

止になってしまうのか、マスメディアやインターネット上では多くの意見が交わされる中、東京大会組織委員会の森喜朗会長は、頑々と（私には）見えてしまうくらい「予定どおり」という立場を示し続けてきました。出場選手の約40%がまだ決まっておらず、選考会の中止や延期が次々と発表される状況で、なぜ「中止」や“延期”のプランも検討している」と発言しなかった（あるいは、できなかった）のか。さまざまな理由があるとは思いますが、ここでは経済に及ぼす影響の大きさを指摘しておきたいと思います。2020年3月21日の毎日新聞では「五輪中止で4.5兆円損失 1年延期は6400億円 関西大が試算 新型コロナで」という見出しの記事が報じられました。この渦中において、もし私が大会開催の責任者であったならば、ギリギリの状況まで、混乱と損失を最小限に抑え



るためにコメントを控えるということも、少しは理解できる気がします。

1984年のロサンゼルスオリンピック大会（以下、ロス五輪）を契機にオリンピックの商業化が進展したことは広く知られていますが、それ以降、年を重ねるごとにオリンピックとビジネスは結びつきを深め、今では大会の開催や運営の意思決定に大きな影響を及ぼすほどの関係になっているといえるでしょう。

2 オリンピックのビジネスと オリンピックを活用したビジネス

①オリンピックのビジネス

ここでいうオリンピックのビジネスとは、IOCや開催都市の組織委員会が、自らの収益を確保するために行う事業のことと定義しておきましょう。

オリンピック＝4年に1回のスポーツの世界大会と思われがちですが、IOCの目的はスポーツを通して平和な世界を実現することにあります。その理念を達成するための活動の一つがオリンピック大会であり、大会の開催以外にも経済的に恵まれない国への支援を含め、さまざまな事業を行っています。

以上のような活動を継続実施するためには資金が必要で、その資金を得ることもIOCが活発なマーケティング活動を行う一つの理由でしょう。

IOCのマーケティングは、ピーター・ユベロス（1984年ロス五輪組織委員長）が考案した、ロス五輪での仕組みを基盤に構築されています。ユベロスは①放映権料、②入場料収入、③スポンサー収入、④ライセンス料、この4点の徹底的な収益化を図りました。特に①放映権料と③スポンサー収入については“権利”という概念の本質（誰かがそれを獲得すれば、それ以外の人は使うことができないという性質。それゆえ、権利の希少価値が高まり、価格が上昇すると考えた）を活用し、放映権における独占放送権方式、スポンサーシップにおける1業種1社方式という新しい制度を導入します。その結果、放映権料は前回大会のおよそ3倍にあたる2億2500万ドルに跳ね上がり、スポンサー収入においても大幅な収益拡大を得ることになったのです。

直近（2013～2016年）のIOCの収入構造をみると、総収入57億ドル（1ドル110円で換算すると日本円で6270億円）のうち、約70%の41億5700万ドルが放映権料であり、約18%の10億300万ドルがTOPと呼ばれるワールドワイドに展開するスポンサーからの収入でした。放映権料とスポンサー収入の二つでIOCの収入の90%近くを占めていることがわかります。また、地域別の放映権料の割合は北米だけで51%を占め、特にアメリカでの放映権を持つNBCは（上記と契約時期が多少ずれますが）2014年のソチから2020年の東京までの冬・夏4大会の放映権を43億8000万ドル（1ドル110円で4818億円）で購入しています。「平昌五輪なのに『時差』？米TVが影響力」（日本経済新聞 2018年1月30日）の記事では、アメリカの視聴者に合わせた時間帯で競技日程が編成されるという側面が指摘されていました。全収入の約40%を支払うお客様（NBC）の提案については、IOCも可能な限り調整しなければならないのかもしれませんが。

②オリンピックを活用したビジネス

では、オリンピックを活用したビジネスとはどのようなことを示すのでしょうか。ここでは、企業等がオリンピックを活用して自社商品の販売拡大を図ること、将来に向けて新たな市場や産業を創出する契機になること、と定義しておきたいと思います。

あるスポーツ用品メーカーのシューズを着用した選手の活躍で同じ型のシューズが爆発的に売れた、オリンピックを観戦する外国からの観光客が増え、ホテルや飲食業の売上が増加した、などは前者のわかりやすい事例になるでしょう。後者については、「レガシー（将来の成長基盤）」（みずほフィナンシャルグループほか、2017）と呼ばれ、近年、注目（再認識）されている考え方です。例えば、1964年の東京大会の際、会場での警備をきっかけに民間警備の重要性が理解され、“警備業”という新たな産業が生まれるきっかけになりました。今回の東京大会でも「オリンピック（スポーツ）×“健康”」や「オリンピック（スポーツ）×“情報・通信”」のコラボレーションが、新たな市場や産業を創出するレガシーとなることに大きな期待が寄せられています。

3 スポーツビジネス（オリンピック）の課題に取り組む

ここでは、スポーツビジネスの現場で起きているリアルな課題の中から、「東京大会の開催問題」と「オリンピック施設の後利用の問題」を取り上げてみました。「東京大会の開催問題」については、すでに3月24日のIOC理事会で“延期”が決まりましたが、ケース問題に取り組むつもりで一緒に解決策を考えてみてください。

①東京大会は予定どおり？ 延期？ 中止？

お題 新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の中、あなたは、東京大会を予定どおり開催すべきだと考えますか？

着眼 “予定どおり”以外の選択肢は“延期”または“中止”が考えられます。では、これら三つの選択肢について、それぞれの課題を比較してみましょう。

検討 “予定どおり”の場合は、選手・観客の健康面や安全性にリスクが残るでしょう。“中止”となると、経済的損失もアスリートの希望も失うことになります。では、“延期”はどうでしょうか。これは数か月か、1年か、2年かでそれぞれ解決すべき課題が変わってきます。短ければ、すでに新型コロナウイルス感染は終息しているか？という不確定要素が残るでしょうし、長くなると選手選考の問題も検討し直さなければなりません。また、施設の再契約やボランティアの再募集、4年ごとの契約になっているスポンサーとの契約問題も解決しなければなりません。

深堀 東京大会組織委員会の高橋理事は、朝日新聞の取材（2020年3月11日）に対し、秋以降の開催は難しいので、1～2年の延期案を考えるべきだと答えていました。その理由の一つに、秋になるとアメリカではアメフトが開幕し、野球のポストシーズンも始まるなど、主要プロスポーツと日程が重なってしまうことを挙げています。IOCの収入の約40%を支払っているのがアメリカの放送局であることを考慮した発言でもありました。

②施設の大会後の活用に関する課題

お題 1529億円をかけて建築した新国立競技場。オリンピック大会後には、毎年24億円以上の年間維持費が必要になってきます。さて、あなたなら、どのように24億円を確保していきますか？

着眼 選択肢としては“税金”または“民間委託”が考えられます。では、この2点について課題を整理しましょう。

検討 国民1人当たり約700万円の借金を抱えている財政状況において、“税金”で対応することは国民の理解を得ることが難しいと推察します。“民間委託”は最も現実的な選択肢とは思

ますが、施設の構造がイベント開催に不向き（例えば、防音や芝生の耐荷重施工）なため、稼働率をアップし、収益をあげる取り組みが行いにくいとの指摘があります。

深堀 実現の可能性は低いかもしれませんが、安田（2020）*が行った大胆な提案を紹介しておきたいと思います。安田は、“税金”でもなく“民間委託”でもなく、全面的な“改築”を提案しています。新国立競技場を（なんと）いったん壊し、ドームスタジアムを800億円の民間資金で建て直す。そして、そのスタジアムをプロ野球の本拠地にするというアイデアです。もし年間観客動員数300万人を誇る読売ジャイアンツを招致できたならば、客単価1万円として、年間売上が300億円。シーズンオフには5万人を集客するイベントを40回開催、客単価5,000円として売上100億円。その他、スタジアム内広告等で50億円、合計450億円の売上などを試算しています。この場合、スタジアム稼働日数110日で450億円を稼ぐことから、スタジアム建設費は数年で回収でき、消費税45億円、固定資産税5億円、借地利収入50億円を想定すると、維持費24億円というマイナスが100億円のプラスに変わるという大胆な提案でした。

4 イノベーション人材を輩出する体育を目指して

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」が重視されています。本稿でもオリンピックに関するビジネス知識を紹介（共有）した上で、スポーツビジネス現場のリアルな課題について、授業で“対話”できるような問いを設定してみました。議論のポイントは、対象の児童・生徒や授業の目標によって異なるとは思いますが、例えば「一度つくった競技場を壊す」という“当たり前（常識）”を疑ってみる発想は、目の前にある現実を変え、よりよい未来を提示する力の育成につながっていくと考えます。

【参考文献】

- ・ IOC. OLYMPIC MARKETING FACT FILE 2020 EDITION. 2020.
- ・ みずほフィナンシャルグループリサーチ&コンサルティングユニット. 2020年東京オリンピック・パラリンピックの経済効果～ポスト五輪を見据えたレガシーとしてのスポーツ産業の成長に向けて～. 2017
- ・ 田島良輝. 商品としてのオリンピック [21世紀スポーツ大辞典]. 大修館書店. 2015
- * 安田秀一. スポーツ立国論 -日本人だけが知らない「経済、人材、健康」すべてを強くする戦略-. 東洋経済新報社. 2020

スポーツを創る

ーオリンピック・パラリンピックの先を見据えたスポーツとの関わりの提案 実践編ー
日本福祉大学教授 ● 藤田 紀昭 ふじた もとあき

1 創るスポーツの進め方

スポーツを修正したり、作ったりするとき、一人でやるよりもグループで進めたほうがさまざまな意見が出るでしょうし、行き詰まったときにも助け合える仲間がいることは心強いものです。教材を生かすためにも、1グループ4～8名くらいのグループで進めることをお勧めします。

①ウォーミングアップ

前号（体育・保健体育ジャーナル第7号）でも述べましたが、スポーツを創る経験の少ない子どもたちにとって、いきなりスポーツを創るよう指示してもなかなかうまく進みません。頭を柔らかくし、いろいろなアイデアが出るようにウォーミングアップをするとよいでしょう。

例えば、10分間で「新聞紙を使ったゲームをできるだけたくさん考える」、「ペットボトルを使った遊びをできるだけたくさん考える」、「バケツの用途をできるだけたくさん考える」などのお題を出し、グループでその数を競い合うなどするとよいウォーミングアップになります。

②スポーツ創りのテーマを決める

スポーツ創りの目的を決めます。みんなが知り合うためのもの、体力づくりを目的としたもの、障害のある人とない人が一緒に楽しめるもの、知的な発達を促そうとするものなどです。授業において自分たちで行うのであれば、あらためて対象者を明確にする必要はありませんが、そうでない場合は対象者の年齢や障害の有無、障害がある場合はその内容や動きの特徴なども明確にしておくとういでしょう。

③作るスポーツの条件を設定する

どこで行うスポーツなのか、どの程度のスペース（広さや天井の高さなど）が使えるのか、使う用具は何か、スポーツを行うときの人数、勝敗を付けるものか、ダンスのように特に勝敗を付けなくてもよいものかなどの条件を設定します。全く条件を付けずに始めるよりも、ある程度条件を設定したほうがスポーツを考えやすくなります。

④時間を決めてグループワークを進める

いよいよスポーツ作りです。時間を区切ってグループワークを進めるようにしましょう。

⑤作ったスポーツを実践してみる

時間になったら、グループごとに作ったゲームを紹介します。このとき、言葉による説明とともに実際にやってみることが重要です。実際にやってみると、うまくいかない点、もっと工夫できる点が見えてきます。

⑥スポーツを実践してみた結果、よい点や改善点、改善方法を明確にする

実践してみた結果をグループで検討し、よい点、改善点、改善方法を明らかにします。

⑦出された改善点や改善方法を試してみる。必要に応じて⑥⑦を繰り返す

⑧完成したスポーツに名前を付け、記録を残す。また、完成したスポーツをアレンジしたものも併せて記録しておく

作ったスポーツは、決められたフォーマットで記録に残しておきます（表1）。写真や動画、イラストな



どを使って誰が見てもわかりやすく記録します。

できあがったスポーツを少しアレンジすると、違ったスポーツとなることがあります。例えば、ボール運びのようなゲームのとき、ボールをどちらが早く運べるかを競うこともできますし、時間内にどれだけのボールを運べるかを競うやり方もあるというような場合です。記録したフォーマットは、ファイリングして残しておくといよいでしょう。

2 スポーツを創るときの留意点

新しいスポーツを作るときには、これまでにない道具の使い方や考え方ができることが重要になります。発想の転換です。その事例を、卓球をベースにしたゲームを考えると表2のようになります。

新しいスポーツ作りはグループワークで進めていきます。そのほうがさまざまな意見や案が出てよりよいものが作れるからです。そうすることで、知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体的に学習に取り組む態度を総合的に高めることができます。

グループワークで出た意見は否定しないということもルール化しておきます。否定ではなくその上をいく創造的な意見を出し合える雰囲気重要です。意見を否定されると次から意見を出しにくくなり、その結果、よいものがないということになります。

グループワークを始めると、中には座って考えてばかりのグループが出てくるがありますが、実際に道具を使っていろいろなことを試しながら意見を出し合うよう促します。最初からうまくいくはずはありません。トライアンドエラーを繰り返す中でできるだけよい方法を見つけるようアドバイスしましょう。

表1 創ったスポーツの記録用紙

NEW SPORT 記録用紙	
年 月 日 ()	作成者
☆スポーツの名前	
☆目的	
☆人数・場所・利用する用具	
☆スポーツのルール、試合の進め方 (イラスト等も入れて)	
☆ゲームのバリエーション	
☆実践してみたの感想、問題点、改善方法	
・ 感想	
・ 問題点	・ 改善方法



表2 発想の転換のためのチェックリスト (日本障がい者スポーツ協会, 2016)

視点		考え方 (卓球の場合)
転用	他の使い道, 新しい用途	<ul style="list-style-type: none"> ラケットはボールを打つのではなく, あおぐ道具 卓球台と卓球ボールでビリヤード
応用	他からアイデアを借りたらどうか, 他に似たようなものはないか, 真似	<ul style="list-style-type: none"> 卓球台上にゴールを作り, ゴールしたほうが勝ち バドミントンコートを使って, ラケット・ボールは卓球で, 車椅子テニス
変更	変えたらどうか, 意味, 色, 動き, 形	<ul style="list-style-type: none"> 卓球台の上で風船バレーボール ボールの色を縞模様にして回転をわかりやすく
拡大	何かを付け加える, 回数を増やす, 長くする, 時間を増やす	<ul style="list-style-type: none"> コートを大きくフロアで行う ラケットを大きく, 2バウンドでもOK
縮小	小さく, 軽く, 短く, 圧縮, 省略	<ul style="list-style-type: none"> 子どもでもできるように卓球台の脚を短くする 障害の重い人側のコートは小さくする
代用	他の材料, 他の場所, 代用品, 動力	<ul style="list-style-type: none"> ラケットをうちわにする 会議用テーブルを台にしてネットは辞書で
再配置	順番を変える, 要素を変える	<ul style="list-style-type: none"> ラリーが長く続いたほうが勝ち ボールをより遅く相手のコートに返したほうが勝ち
逆転	順番, 役割, 基準, 勝敗, 上下逆	<ul style="list-style-type: none"> ネットの下をくぐるようにする ゴロで返す, ボールのバウンド数を競う
結合	混合する, 組み合わせ, 障害の有無	<ul style="list-style-type: none"> バレーボールのように6対6 障害のない人とある人とのダブルス

*

「創るスポーツ」の実際について述べました。スポーツを修正したり, 作ったりすることは, それ自体がスポーツの多様な楽しみ方の一つです。その過程では, 学習指導要領で指摘されている知識・技能, 思考力・判断力・表現力, 主体的に学習に取り組む態度を総合的に高めることも可能です。

人間がその生活を支え, 豊かにし, 向上させるための創意・工夫が文化であるとするならば, 「創るスポーツ」は正に文化的な行為と言えるでしょう。作曲家が音符を駆使して新しい曲を作るのと同じで, ボールの大きさや柔らかさといったもの一つ一つが音符と同じ役割を果たすと考えれば, スポーツも音楽と同じく無限に創れることがわかります。「創るスポーツ」, ぜひチャレンジしてみてください。

【参考文献】

- ・文部科学省. 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 保健体育編. 2018.
- ・藤田紀昭. MADE IN NFU ニュースポーツ&ゲーム100. 日本福祉大学, 2009.
- ・(公財) 日本障がい者スポーツ協会編. 新版 障がい者スポーツ指導教本 初級・中級. ぎょうせい, 2016.
- ・文部科学省. 中央教育審議会初等中等教育分科会 (第100回) 配布資料 教育課程企画特別部会 論点整理「新しい学習指導要領等が目指す姿」. 2015.

シリーズ 学校現場でのスポーツ・コンプライアンスを考える ③

スポーツ界のひずみをなくすために

東京大学名誉教授／東京健康リハビリテーション総合研究所長 ● 武藤 芳照 むとう よしてる

学校スポーツの現場でのコンプライアンス違反事例や不祥事が重なれば、児童・生徒にとってのスポーツの価値が失われます。医療の世界では「予防に勝る治療はない」とされていますが、スポーツ界でのコンプライアンス違反事例についてもそれは共通しています。児童・生徒、顧問教諭・指導者・コーチ、保護者などへの教育という手段を用いた予防を図る営みを継続すること、それとともに、違反が起きるリスク（発生要因：①機会、②動機、③正当化）を除く努力をすること、そして、万一違反事例が発生した場合には、「遅れず、隠さず、ごまかさず」、迅速かつ適切に対処できる体制を整えておくことが大切です。

学校スポーツに関わる一人一人が、コンプライアンスの意識を高めることが、スポーツ界のひずみをなくし、児童・生徒にとって大切なスポーツの価値を守り育むことにつながるのです。

1 不正行為の仕組み (不正のトライアングル)

不正行為、コンプライアンス違反、不祥事（事件・事故）などには、3つの要因（不正リスクの3要素）があり、その相互作用によってそれぞれの不正が発生する仕組みがあるとされています（米国の犯罪学者ドナルド・R・クレッシーが提示した3要素を、W・スティーブ・アルブレヒトが図式化したとされる）。

第1は機会。よくないこと、禁止されていること、ルール違反、法律違反などの不正行為を行うことができる・起こせる、あるいは行いやすいような環境や状況があることです。

第2に動機。不正行為をしたい、したくなる、しようと思う、不正を働く自分自身の事情や理由があることです。

第3に正当化。自分を正当化すること、正当な行為

と考えることです。

動機について、自分自身で「やむを得ないから」、「無理もないから」、「しかたないから」と自分に都合よく考えて行ってよいと認めてしまうことです。

したがって、機会・動機・正当化の3つの要因（不正リスクの3要素）が重なれば、1つの不正行為が生まれてしまいます（図1）。

この仕組みに基づいて、学校スポーツでの不正行為、コンプライアンス違反・不祥事を予防する対策を考えます。第1に、不正行為につながる「機会」をなくす体制をつくること。第2に不正行為を行う「動機」や「正当化」を許さないという児童・生徒、顧問教諭・指導者・コーチ、保護者などの意識を広げ定着化させることです。

そのためには、スポーツの現場に限らず学校生活全般、家庭・地域を含めた日常生活の中で、規則・決まりごとを守ることが大切という教育が最も重要であり有効なのです。

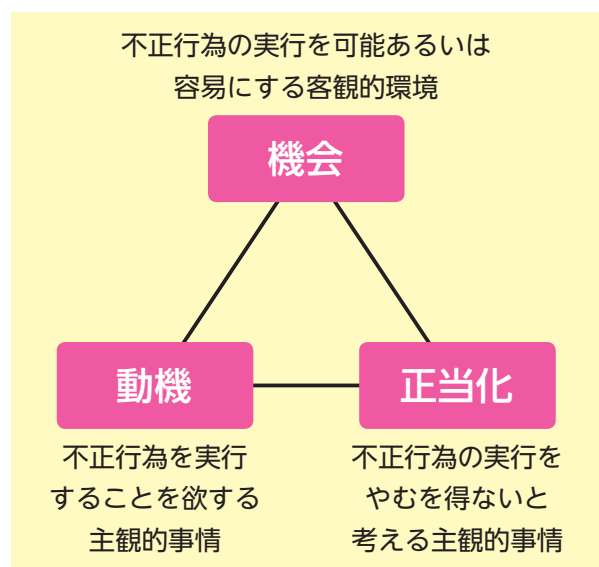


図1 不祥事が発生する仕組みの理解
(不正のトライアングル)

(スポーツ・コンプライアンス・オフィサー養成講習会の講義資料、櫻井 2019より作成)

2 不適切な事案が発生した場合の対応

もし、不正行為やコンプライアンス違反の事案、不祥事（事件・事故）が発生した場合には、公正・公平かつ素早く、皆によくわかる形と方法で、応急的に対応します。そして、何がどのように起きたのかという事案（5W1H：Who誰が、Whenいつ、Whereどこで、What何を、Whyなぜ、Howどのように）を解明し、正すべきところは正し、同じようなことが再び起きないように再発防止策をつくるのが大切です。

危機管理には、2つの側面があります。起き得る危機事案に対して、あらかじめ備え、発生要因（リスク要因）をなくすあるいは低減すること（リスク・マネジメント）と、起きてしまった危機事案に対して、迅速・適切に対処すること（クライシス・マネジメント）です。前者には予防の観点から日常的な教育が必要であり、後者には迅速・公正・公平・真摯な姿勢と行動が大切です。

不適切な事案に対して、誠実に取り組み、かつその対応の様子を外部に適時公表して明らかにし（透明性を保つ）、再発防止を図るとともに、児童・生徒、顧問教諭・指導者・コーチ、保護者などにも周知説明し、そのチーム・運動部・クラブ・競技団体などの組織が今までよりよい形に生まれ変わる（再生する）ことを目指します。

基本的には、スポーツの価値を守ること、児童・生徒のスポーツに対する熱意と率直な思いや気持ちを尊重することが重要です。そして、外部への公表に当たっては、「遅れず、隠さず、ごまかさず」がポイントなのです（図2）。

最近話題になった事例として、小学校でのいじめ対処のための「仲直りの会」で、当事者の児童同士の握手があります。いじめを受けた子は「握手したくない気持ち」であったのに、先生がその子の手を引っ張り、いじめた子と握手させ、「そのことは終わりにしよう、これで仲直りだね」としました。被害にあった児童の気持ちが尊重されず、加害者側の児童の指導・教育もないまま、形式だけの大人の立場の正当化のための不適切な事後対応と言わざるを得ません。



図2 不適切な事案が発生した場合の対応

（スポーツ・コンプライアンス・オフィサー養成講習会の講義資料，上柳 2019より作成）

昨今、スポーツ界に限らず、行政、企業などさまざまな分野での不適切な事後対応の例が見られますが、「失敗から学ぶ」という冷静な判断と知恵も必要でしょう。



「仲直りの握手」：いじめられた子は不本意、いじめた子も心から謝罪しているわけではなく、しかたなく握手している。

3 スポーツ現場でのひずみをなくすために

学校スポーツにおけるコンプライアンス違反、不正行為、不祥事などをなくすために、次のような取り組みを皆で真摯に続けることが大切です。

①スポーツのよい物語・エピソード・言葉を伝える

古今東西のスポーツ界で活躍した人々の立派な活動



やエピソード、スポーツマンシップ、フェアプレイ精神を示した物語、指導・教育、コーチングの成功事例、よい言葉などをわかりやすく、しっかりおもしろく語り、伝え、広げることを積み重ねます。そうした営みを通して、児童・生徒、顧問教諭、指導者・コーチ、保護者などのスポーツの価値、力、大切さについての正しい意識が高められるのです。

最近の事例では、女子テニスの大坂なおみ選手のエピソードがあります。2019年9月の全米オープン女子シングルス3回戦で、世界ランキング1位の大坂選手（21）が、初出場の米国のコリ・ガウフ選手（15）に快勝しました。号泣するガウフ選手を試合後のインタビューに誘い、勝者と敗者が並んでセンター・コートに立ち、それぞれの思いを語りました。まさに「勝っておごらず、負けて悔まず」、フェアプレイ精神が見事に発露された光景でした。

②コンプライアンス違反事例から学ぶ

スポーツ現場や近隣の学校、あるいは全国の学校で最近起きた実際のコンプライアンス違反、不正行為、不祥事、不適切な事例について、「5W1H」の6つの要素を明らかにして、同じような事例が起きないためにどのようにしたらよいかを考えることが必要です。「失敗から学ぶ」、「失敗を教訓にする」よう、日常的に意識することです。失敗を経験した後、「記憶を父とし、記録を母とし、そこから生まれる子どもが教訓」（作家・評論家 保阪正康）なのです。

労働災害に関わる「ハインリッヒの法則」は、1件の重大事故の背景には29件の軽微な事故があり、さらには300件の異常（ヒヤリ・ハット事例）があると教えてくれています。したがって、1つの不正行為を精微に分析することで、次の同種の事例の発生を防ぐことにつながるよう、皆で共同作業（事例検討会）をすることも有用です。

③意識が変われば行動が変わる

「意識が変われば行動が変わる、行動が変われば習慣が変わる、習慣が変われば人格が変わる、人格が変われば運命が変わる」という言葉があります（ヒンズー教の経典の言葉などの説がある）。大好きなサッ

カー、野球、陸上競技、水泳、柔道、体操などのスポーツを大切にするために、「すべきことをしないのはやめよう」、「してはいけないことをするのやめよう」というのがスポーツ・コンプライアンスの行動の基本です。児童・生徒一人一人がそうした意識を、スポーツの現場だけでなく、日常の家庭・学校生活において守り合うことが、学校でのコンプライアンス意識の着実な醸成に結びつくのです。

*

スポーツ・コンプライアンスという言葉は、一見難しそうですが、要は、自分たちが大切にしているスポーツが損なわれたり、傷つかないようにしたりして、スポーツの価値を守るために「ダメなものはダメと言おう」、「ならぬことはならぬものです」（会津藩「仕の掟」より）を一人一人が意識し、スポーツの友や仲間をお互いに大切にすることなのです。

【参考文献】

- ・一般社団法人スポーツ・コンプライアンス教育振興機構. まんがでわかる みんなのスポーツ・コンプライアンス入門. 学研プラス, 2019.
- ・一般社団法人スポーツ・コンプライアンス教育振興機構. 第1回スポーツ・コンプライアンス・オフィサー養成講習会講義資料. 2019.



パラリンピック教材「I'mPOSSIBLE」—スポーツと共生社会—

公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 強化部国際課長
I'mPOSSIBLE日本版事務局 副プロジェクトリーダー ● 安岡 由恵やすおか なおえ

パラリンピックをご覧になったことはあるだろうか？現在のパラリンピックは世界中の障がいのあるエリート選手が鎬を削る、見ごたえのあるスポーツへと進化している。選手のパフォーマンスは見るものを圧倒し、障がいがあることを忘れさせ人間の可能性を再認識させてくれるもので、見た人はそれまでの「障がい者」への認識を一変させることだろう。

パラリンピックのことをよくご存じでない日本の先生方にも、負担なく気軽にパラリンピック教育をご自分で行っていただきたい……。国際パラリンピック委員会（IPC）公認教材「I'mPOSSIBLE日本版」はそんな思いで開発された。今回はこのI'mPOSSIBLEとは何か、また「パラリンピックを通じて共生社会についての考え方を学ぶ」とはどういうことなのかについてお伝えしたい。

1 背景

東京2020大会の決定を受け、大会に向けたオリンピック・パラリンピック教育が義務化・推奨される動きがあった。さらに今年度からは「パラリンピック教育」が学習指導要領に含まれることになり、取り組みを推進する動きが高まっている中で、「パラリンピック教育には興味があるが、どう教えてよいかわからない」、「教材も素材も資料もない」、「準備する時間がない」、「よく知らないので間違ったことを教えたくない」といった声が多く聞かれた。また、中学校・高等学校では、パラリンピック教育は体育教師が担当となっており、「体育の授業で共生社会についての学習と言われても……」と当惑された声も伺った。

選手による講演会など直接的な声は何物にも代えがたい説得力を持つが、「特別な知識や経験を持った人」がいなければ授業ができないのであれば、パラリ

ンピック教育は広がっていかない。何とか現場の先生方に、ご自分でパラリンピック教育を行っていただけないか、というのが本教材の開発を始めた理由だ。

2 I'mPOSSIBLE日本版の開発

I'mPOSSIBLE国際版は、東京2020大会を迎えるに当たり、IPCとその開発を担うアギトス財団、日本財団パラリンピックサポートセンター様の協力で作成されたものであり、これをもとに、日本の先生方に使用していただきやすいように、教材の一部を再構成して作成されたのが「I'mPOSSIBLE日本版」だ。

I'mPOSSIBLEのセットは、国公立・私立を問わず、日本全国の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校をはじめとするすべての学校に無料で発送されている。小学生版、中学生高校生版があり、いずれも14ユニット（1ユニット1授業分）で、座学の授業も、パラリンピック競技を体験する実技の授業もある。原則としてどの順番で使用してもよく、またどのユニットも単独で使用することも、組み合わせで使用することもできるようになっている。各クラスの実態に合わせて、使用する単元を選択することができる仕組みである。

教材には、授業案や授業を進める際に児童・生徒に見せるための授業用シート、児童・生徒が直接書き込んで使用できる授業用ワークシートのほか、実際の授業シートに対応した言葉かけ例やヒント・解説例などを記載した授業用ガイド、さまざまな動画教材などが含まれている。また、授業ではクイズやグループディスカッション等を用いたアクティブラーニングも多用しており、児童・生徒が自発的に学びに関われる仕組みとなっている（図1）。

2019年に実施したアンケートによると、



図1 I'mPOSSIBLE日本版の教材

「I'mPOSSIBLEを授業で使用する際の1コマ当たりの事前準備時間」について、82%の教師が1時間未満と回答した。新しい試みや考え方の詰まった教材であるが、気軽に試していただけるのも魅力の一つであると自負している。

3 I'mPOSSIBLEで伝えたいこと

本教材では、パラリンピックの歴史やスポーツについて学ぶユニットももちろんある。しかし、すべてのユニットを貫くのは、パラリンピックスポーツの中に随所で見られる理念、つまり教材のタイトルにもなっている「できない (Impossible)」と思えたことも、「少しの工夫 (I)」をすることで「できる (I'mPOSSIBLE)」に変わる、という考え方だ。

パラリンピック競技の規則や用具に見られる「できない」を「できる」に変えるための工夫、言い換えると、選手が競技場で能力を発揮するための工夫を社会の中にも取り込めれば、さまざまな人たちがそれぞれの能力を生かせる社会が実現できるのでは、という気づきのための学びがすべてのユニットの根底にある。

生徒にとどまらず、多くの先生方から、自身にも多

くの学びがあったという声が寄せられており、児童・生徒を取り巻く周囲の大人たちの認識・行動の変容の場ともなることが報告されている。また、学習したことを活用するため、地域の共生社会実現のための活動に児童・生徒自らがつなげていった例も報告されている。

4 おわりに

I'mPOSSIBLEの最大の課題は認知度およびその普及だ。本教材のセットは、日本全国の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校をはじめとするすべての学校に2017年春から送付されている。しかし、I'mPOSSIBLEがご自分の学校に届いているということをご存じない先生方が非常に多くいらっしゃる。学校で受け取った際、「パラリンピック教材」と記載されていると、多くの場合、体育の先生の手元に渡るが、体育の授業にどのように活用すればよいのかわからずそのままになっている、という状況も伺った。体育の授業でのご活用はもちろんのこと、他の先生方にもご共有いただき、貴校でのI'mPOSSIBLEを通じた学びを広げていただけないだろうか。また「I'mPOSSIBLE日本版」事務局では、教材の使用法やパラリンピック教育の意義についての教員研修会も承っているので、ぜひご活用いただきたい。

東京2020大会は1年の延期が決定した。この期間、世界中でかつて経験したことのないような困難な状況が続くだろう。しかし、このような中でこそ響くパラリンピックの価値はあるはずだ。学習指導要領に「パラリンピック教育」が含まれた今年、I'mPOSSIBLEを使用した授業を実施していただければ幸いである。

お知らせ
 紹介した教材はすべて東京2020教育プログラムポータルサイトよりダウンロード可能です。「東京2020パラリンピック教材」で検索してください。教員研修会および教材についてのお問い合わせは、I'mPOSSIBLE日本版事務局まで。
 E-mail: iampossible@parasapo.tokyo



with Sports 「スポーツと生きる人」から、スポーツの今とこれからを知る

井上 康生さん

柔道男子日本代表監督
東海大学体育学部武道学科教授

日本発祥のスポーツである柔道。井上康生さんは男子日本代表監督に就任後、**理知的な指導と数々の改革**に取り組み、ニッポン柔道をV字回復させた。同時に**競技発展を願い、学校での柔道指導などにも力を入れる**。そんな井上さんに、**指導をする上で日ごろから大事にしていることや、自身の経験を踏まえた指導者の在り方について、話を聞いた。**

取材・文／荒木 美晴

4年前のリオデジャネイロオリンピック大会で、金メダル2個を含む7階級すべてでメダルを獲得した柔道男子日本代表。最高峰の舞台上で選手が見せた強さ、そして凛とした姿は、私たちの心に深く刻まれた。

井上さんは技術の強化だけではなく、柔道への“情熱”，困難に立ち向かう柔軟な“思考力”，仲間や相手を敬う“誠意”を持つ大切さを、選手に説いてきた。

『熱意・創意・人間力』は、井上さん自身が錬成を積む中で学んだこと。「社会で生きていく上でも必要な能力だと思っています。そして、それを磨くことができるのが、スポーツというもの。柔道でも野球でもテニスでも、なんでもいい。スポーツを通して、一人の人間として、自分で未来を切り開く力をつけてほしい」。とりわけ、子どもに伝えたいメッセージだ。

5歳から柔道を始めた井上さん。柔道家として成長する過程で、大いに影響を受けた人がいるという。「まずは両親。父が師匠でもある柔道一家に育ちました。のびのびと楽しく柔道を教わる一方で、父は特に礼節に厳しく、稽古の最後に礼をせず帰ろうものなら、こてんぱんに怒られました。母は、私に逃げ道を作ってくれるような存在で、二人の両輪があってこそこの私だと思います。また、進学先の東海大学には山下泰裕先生がおられました。自分もこうな

りたいという目標が身近にあったからこそ、今の自分が確立されたのだと感じています」

競技人生の節目でどんな指導を受けるか、そしてどんなロールモデルに出会うか。それが選手にとってどれだけ大切かを誰より知っているからこそ、地域のクラブチームや学校の部活動の指導法にも注視しているそう。

大人に教えるよりも、はるかに難しいとされる子どもたちへのスポーツ指導。



いくら一流の技を教えても、導入の部分で「楽しい」という感情がそがれれば、そこから前に進むのが難しくなるかもしれない。現場の指導者を悩ます課題の一つだ。

井上さんによると、参加者が120人を超えるというある道場は、礼儀作法を教えつつ、4～5歳児には道場内を走らせたり、畳の上で転がらせたりして、純粋に体を動かす楽しさを感じてもらおうところから始める工夫をしているそうだ。そうすることで、結果的に子どもたちの能力を引き上げることができるのだという。「現場の先生は苦勞しながらも愛情を持って大切に育てておられるのがわかります。でも、ボランティアで教えている方が少なくありません。柔道界の未来のために、もっと指導者自身が生きがいややりがいを持って取り組める世の中を作っていけないといけないと感じています」

もちろん、楽しいだけでは強くなれない。“我慢”や“悔しさ”を経験することも成長に不可欠だ。「想定外のことや理不尽な出来事に遭遇することもある。そうした壁に子どもたち自身が苦しまないように、根性論や精神論も絶対に必要だと私は思っています。彼らがタフに生きていけるよう導くことも、我々の使命ではないでしょうか」

それは日本代表の世界でも同じで、最新のトレーニング場、管理された食事、稽古の質を上げる練習相手を用意するなどの万全の環境を整えているが、その“当たり前”に慣れてしまったせいで、失われるものもあるのだという。特にオリンピックはその最たるもので、日の丸をつけた選手ですら、華々しい舞台の裏でこれまで感じたことのないプレッシャーから全く力が出せずに終わることも多いのだとか。そのため、合宿等ではあえて非効率かつ非科学的な環境を作り出し、普段と違う状況をどう乗り越えるか、選手の対応力を見極めているそうだ。

昔も今も情熱を注ぐ柔の道。井上さんはその背中で、今後も教え子たちを引っ張っていく。

PROFILE ● いのうえ こうせい

1978年生まれ、宮崎県出身。東海大学体育学部武道学科卒業、同大学院体育学研究科修士課程修了。日本を代表する柔道家で、切れ味鋭い内股を武器に世界選手権100kg級で3連覇。シドニーオリンピック大会では金メダルを獲得した。2008年に第一線を退き、2年間の英国留学を経て、2011年から全日本強化コーチ、2012年11月より全日本男子監督を務める（現在2期目）。

学研・教科の研究

体育・保健体育ジャーナル

第8号

『小学校体育ジャーナル』(通巻95号)

『中学校保健体育ジャーナル』(通巻121号)

令和2(2020)年5月発行

発行人…甲原洋

編集人…木村友一

発行所…(株)学研教育みらい

デザイン…宮塚真由美

表紙オビイラスト…丸山誠司

印刷所…(株)廣済堂

●お問い合わせは、「小中教育事業部」へ 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8 学研ビル
内容については▶TEL. 03-6431-1568 (編集)

それ以外は▶TEL. 03-6431-1151 (販売)

「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/>

●「体育・保健体育ジャーナル」のPDF版および電子版は、上記WEBページから。

